

## 小児看護領域における統合看護実習プログラムの実際

三宅香織 糸井志津乃  
(Kaori MIYAKE, Shizuno ITOI)

### 【要約】

《目的》小児看護学領域での統合実習において、日本の小児医療や社会情勢を鑑み、小児・成人混合病棟と地域で生活する医療的ケア児の事例を踏まえたフィールドワーク実習を併用した実習プログラムの報告と今後の課題について検討する。

《方法》混合病棟での実習は、子どもの成長発達に必要な環境および支援の在り方について学べるために、入院している子どもと家族の看護実践や見学を行った。また、混合病棟でのマネジメントとして、病棟マネジメントの見学や看護管理者による臨床講義を設け、リーダーシップやメンバーシップについて学ぶ機会を設けた。フィールドワーク実習は、入院していた医療的ケアを必要とする子どもが自宅へ退院する際、看護師がどのような援助が必要となるかを理解できるよう、医療的ケア児と家族の紙上事例を用いたフィールドワークを行った。

《結果》学生は、混合病棟による実習と医療的ケア児の事例を用いたフィールドワークの実習プログラムを遂行して学びを深めることができ、実習目標を達成することができた。

《結論》今後は、フィールドワーク実習を進める上で生じた課題を基に実習プログラムを見直すことや、教育効果を検証し、混合病棟とフィールドワークを併用した実習プログラムの確立が課題となった。

キーワード：小児看護学、統合看護実習、小児・成人混合病棟、フィールドワーク、実習プログラム

### I. はじめに

看護基礎教育は、少子高齢化社会の進行や医療の高度化等の社会情勢の変化に対応するために、その時々でカリキュラムが検討されてきた。2008年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則改正において、看護学の各領域に共通する内容としての統合分野である「看護の統合と実践」が新たに設置された。「看護の統合と実践」の臨地実習（以下、統合看護実習）は、病院施設以外に、在宅療養やリハビリテーションなどの治療を終えた後の過程における人々の生活に即した支援を体験できるよう、多様な実習形態を取り入れ、効果的な臨地実習ができる体制の整備が望ましい等が明記されている<sup>1)</sup>。本学の統合看護実習は、実習テーマ13課題が学生に提示されており、病院、介護施設や役所などの実習施設で実施している。

近年、少子化により小児病棟が成人との混合病棟化や閉鎖が進んでおり、病院施設の実習場所の確保が困難になっている。2015年に厚生労働省より、「母性看護学実習及び小児看護学実習における臨地実習について」<sup>2)</sup>が通知され、病院以外も実習施設に含めることが示された。通知を受け、小児看護領域の実習は、小児や成人との混合病棟、保育所や幼稚園などの様々な場で実施されている。これまで、本学の小児看護領域での統合看護実習は、病院施設の新生児集中治療室で実習を実施してきた。しかし、2020年頃から流行している新型コロナウイルス感染症の影響もあり、実習場所の一部変更が必要となり、小児・成人混合病棟で実習を実施してきた。そして、本年度は、実習場所の確保がさらに困難となったため、小児・成人混合病棟実習に加えて、医療的ケア児の事例を踏まえたフィールドワークを取り入れた実習プログラムを立案した。

フィールドワークは、学生が主体的に学び、社会の問題解決に参加し実践力を育成するには有用であると言われており<sup>3)</sup>、統合看護実習の実習目標を達成するための方法として、効果があるのではないかと考えた。また、小児看護学領域においては、医学の発展により、新生児集中治療室などに長期で入院した後に、引き続き在宅での医療的ケアが必要となる子どもが増加している<sup>4)</sup>。そのため、医療的ケア児の紙上事例（以下、事例）を用いたフィールドワーク実習を行うことは、母子保健や子育て支援の施策等を踏まえることができる考えた。そして、混合病棟の実習後にフィールドワーク実習を組み合わせることで、入院中に必要な子どもと家族への看護や退院後の日常生活の中で必要な支援の実際について理解し、学びを深められると考えた。

そこで本報は、小児看護学領域で今年度より新たに立案した小児看護学領域における、小児・成人混合病棟と医療的ケア児の事例を踏まえたフィールドワーク実習について、実習プログラム内容の実際と今後の課題や改善点について報告する。

## Ⅱ. 統合看護実習の概要

統合看護実習は、4年次の5月に実施される。

### 1. 統合看護実習の目的および目標

統合看護実習の目的は、現代の社会情勢を踏まえ、興味や関心をもって看護実践上のテーマを探求し、それらを取り巻くマネジメントの理解、さらに地域連携を包含する多職種との連携・協働、保健医療福祉施設における看護職の役割へと視点を広げ、テーマに関する学びを統合する。実習目標は以下の3点である。

- (1) 看護実践上のテーマについて、マネジメント及び多職種連携の視点を含めて統合的に理解でき、今後の展望について説明できる。
- (2) 看護職者として責任ある自律した態度と倫理観をもって学修できる。
- (3) 実習での学びを学生間で共有し、統合することができる。

### 2. 統合看護実習のテーマ

学生は、3年次までに履修した専門領域の実習を踏まえ、社会背景をとらえながら看護実践上のテーマを探求する。また、マネジメントに関連する学びができ

るよう、事前学習から実習中、事後学習について、学生が主体的に進められることを実習のねらいとしている。学生には、基礎看護学、成人看護学、在宅看護学、老年看護学、母性看護学、小児看護学、精神看護学および地域看護学の9領域から13課題が提示されている。実習配置は、学生の興味や関心に基づいて決定される。

### 3. 統合看護実習の方法

実習前にオリエンテーションへの参加、実習に必要な実習領域に即した事前学習や既習学習の復習などを進めることが求められている。

実習中は、学生が設定した実習テーマの内容に応じて、実習施設や地域で見学や実施を行い、学びを統合させていく。実習記録は日々の実習目標や行動計画を記載する用紙は指定されている。それ以外の記録様式は、学生が自由に設定して良いことになっている。

実習最終日は、学生が事前に設定した実習課題の問題解決に向けて、学びを統合する時間が設けられている。具体的には、統合看護実習の課題別グループで学びをまとめて、その内容を看護領域毎に発表会を実施することや、ゲーグルクラスルームで発表会の資料を一定の期間、掲示することで他看護領域のグループと学びを共有できるように設定されている。

## Ⅲ. 小児看護学領域の統合実習概要

小児看護学領域は、3つの課題を設定した。課題Aの実習施設は、地域周産期母子医療センターに指定されている母体搬送受入可能施設のNICUである。課題Bの実習施設は、総合周産期母子医療センターで、あらゆる母体・胎児集中治療管理や新生児への対応が可能な施設のGCU/NICUである。2つの課題の実習のテーマは、発達支援である。主に、新生児医療や発達外来等での援助の実際を通して、子どもの成長発達に必要な環境や支援のあり方について学ぶことを狙いとしている。課題Cは混合病棟とフィールドワーク実習である。

### 1. 事前の共通課題

課題A～Cの学生は、実習前に共通の事前課題に取り組む。事前課題の内容は、学生が自己の課題を明確にできるよう、文献検討、小児看護技術に関連するまとめ、小児看護学に関連する科目の復習を約2か月で

取り組むよう設定した。

#### (1) 文献検討

文献検討は、教員が提示した文献をリストの順に読んでまとめ、学生が自己の課題を具体的に立案できるように、文献の選択をした。文献テーマは、小児看護における看護マネジメント、小児看護実践上の課題と課題を取り巻く背景、病院での多職種との連携や協働における看護師の役割についての計10報を提示した。

#### (2) 小児看護技術に関連するまとめ

小児看護技術に関連するまとめは、ガイドラインを読むこと、実習施設で必要となるだろう小児看護技術のまとめておくことである。

ガイドラインは、実習施設と課題を踏まえて「NICU に入院している新生児の痛みのケアガイドライン」<sup>5)</sup>と「保育所等における医療的ケア児への支援に関する研究会（2021）：保育所等での医療的ケア児の支援に関するガイドライン」<sup>6)</sup>を指定した。学生がガイドラインを読むことで、統合看護実習で援助する小児とその家族への看護実践に活かすことをねらいとしている。

小児看護技術は、実習施設で必要になる内容をまとめるように提示した。胎児期から新生児期および乳幼児期の子どもの成長発達とその支援について、母性看護学や健康障害論などの関連する領域をまとめ、看護実践に伴う技術を書籍や動画を用いて事前学習するよう提示した。

学生は、これらの課題に取り組んだのち「統合看護実習で学びたいこととその理由」をレポートにまとめ、実習に臨んだ。また、この内容を実習指導者とも共有し、学生が自主的に課題に取り組めるための、教育支援の基礎資料として使用した。

## IV. 混合病棟とフィールドワーク実習の概要

### 1. 混合病棟とフィールドワーク実習のねらい

課題 C の実習テーマは、「子どもの健康支援」で、ねらいは以下の3点である。

- (1) 子どもの健康状態に対しての援助の実際から、子どもの成長発達に必要な環境および支援の在り方について学ぶ。
- (2) 子どもの健康支援に必要な各部署でのリーダーシップやメンバーシップの在り方について学ぶ。
- (3) 退院後に地域で生活する子どもと家族への支援について考察する。

学生は、(1) (2) は混合病棟実習、(3) はフィールドワークで学ぶため、実習の学びを統合し、目標達成できるよう取り組む。

## 2. 実習スケジュールと参加学生

実習期間は2週間（10日間）である（表1）。1週目は混合病棟で、2週目はフィールドワーク実習とした。

調査地域は、3つの病院と1つの商業施設やその周辺地域と駅周辺で行った。移動は電車や徒歩であった。

参加学生は2名、交通費等の予算は自費である。

## 3. 混合病棟での実習

### (1) 実習施設の概要

1週目に使用した実習施設は、約600床の総合病院の小児と成人の混合病棟である。病床数は42床を有し、内訳は小児科が10床で32床は成人を対象としている。子どもの主な入院理由は、急性期の感染症、呼吸器疾患、周手術疾患、白血病、検査入院や新生児等の治療や検査である。成人は内分泌代謝科、整形外科、循環器科、眼科、乳腺科等の治療を有する患者を受け入れている。

病院内には、小学生から中学生を対象とした院内学級がある。体調や治療計画によっては、ベットサイド授業が実施される。

看護体制は固定チームナースングである。

### (2) 実習指導体制

主に、小児科、循環器科、整形外科等を担当してい

表1 実習期間

	月	火	水	木	金
1週目	小児・成人混合病棟①	小児・成人混合病棟②	小児・成人混合病棟③	小児・成人混合病棟④	小児・成人混合病棟⑤
2週目	フィールドワーク①（課題C周辺）	学内（事例に関する技術演習）	フィールドワーク②（課題A 病院周辺）	フィールドワーク③（課題B 病院周辺）	学内（学びの発表会および学びの共有）



るチームの看護師から、指導を受けながら実習を行った。看護マネジメントは、病棟師長やリーダーナースのジョブシャドウイング（以下、シャドウイング）や、病院の看護管理者による臨床講義を受けた。

### (3) 実習内容と進め方

混合病棟での実習スケジュールを表2に示した。学生は、事前学習を踏まえて、病棟看護師のシャドウイングと一部看護実践の実施、臨床講義やカンファレンスを実施した。

#### ①課題Cのねらい（1）の実習方法

混合病棟における実習のねらいの1つ目は、子どもの健康状態に対しての援助の実際から、子どもの成長発達に必要な環境および支援の在り方について学ぶことであった。そのため、成長発達に必要な環境および支援の在り方について、入院している子どもや家族に対する看護実践の見学や看護師、医師、院内学級の教員によるショートカンファレンスに参加した。

#### ②課題Cのねらい（2）の実習方法

混合病棟における実習のねらいの2つ目は、混合病棟における子どもの健康支援に必要な各部署でのリーダーシップやメンバーシップの在り方について学ぶことであった。リーダーシップやメンバーシップの在り方については、受け持ち看護師やリーダー看護師のシャドウイングを主に実習した。他に、実習3日目に看護部管理者による臨床講義を受け、マネジメントについての学びを統合する時間を設けた。

#### ③学びを統合するための実習方法

日々の振り返りを主としたカンファレンスを行い、学びを深めた。また、病棟実習の最終日は、混合病棟実習におけるねらいに対する学びを統合できるよう、テーマカンファレンス「混合病棟での看護とマネジメ

ントについて」を実施した。

### 4. フィールドワーク実習

フィールドワーク実習の過程を図1に示す。フィールドワーク実習のねらいは、退院後に地域で生活する子どもと家族への支援について考察することである。そのため、実習目標が達成できるよう、フィールドワークの文献<sup>7)8)9)10)</sup>を参考に実習プログラムを作成した。

実習は、入院していた医療的ケアを必要とする子どもが自宅へ退院する際、看護師がどのような援助が必要となるか、といった位置づけであった。そのため、地域で生活する人々であることをより意識しやすく、地域特性について具体的に調べ、考えやすいように事例の設定を工夫した。事例は、医療的ケアが必要な子どもと家族の事例とした。目標は「不安のある母親の相談に看護師として回答すること」、リサーチクエスションは、「事例の子どもと母親は、初めて、公共交通機関を使って商業施設に遊びにいけないか」とし、小児看護の視点を持って実施するよう提示した。

フィールドワーク実習の過程は、フィールド選定1、事例のアセスメント、フィールド選定2、フィールドワーク方法の決定、フィールドノートをつける、データ分析、成果で構成されている。取り組む時期は、実習前と実習中である。

学生は、実習前に事前学習として事例のアセスメント、フィールド選定2、フィールドワークの時間や移動方法の決定の課題に取り組む。実習中は、フィールドノートを付け、データ分析し、成果の発表をし、これらの学びを統合するプログラムとした。記録は、電子媒体を使用し画像の加工や保存、データ共有の方法

表2 混合病棟での実習スケジュール

曜日	月	火	水	木	金
日数	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
場所	混合病棟	混合病棟／院内学級	混合病棟	混合病棟	混合病棟
主な実習内容	病棟オリエンテーション	小児患者のケア見学および情報収集	小児・成人患者のケア見学や一部実施および情報収集	小児・成人患者のケア見学や一部実施および情報収集	小児・成人患者のケア見学や一部実施および情報収集
	小児患者のケア見学および情報収集	院内学級連絡会の参加および説明会	病棟マネジメントの一部見学	病棟マネジメントの一部見学	病棟マネジメントの一部見学
	病棟の小児科ケースカンファスへの参加		看護管理に関する臨床講義	病棟ディカンファレンスの見学	病棟ディカンファレンスの見学
					最終カンファレンス

目標：不安のある母親の相談に看護師として回答すること

リサーチクエスチョン：事例の子どもと母親は、初めて、公共交通機関を使って商業施設に遊びにいけるのか

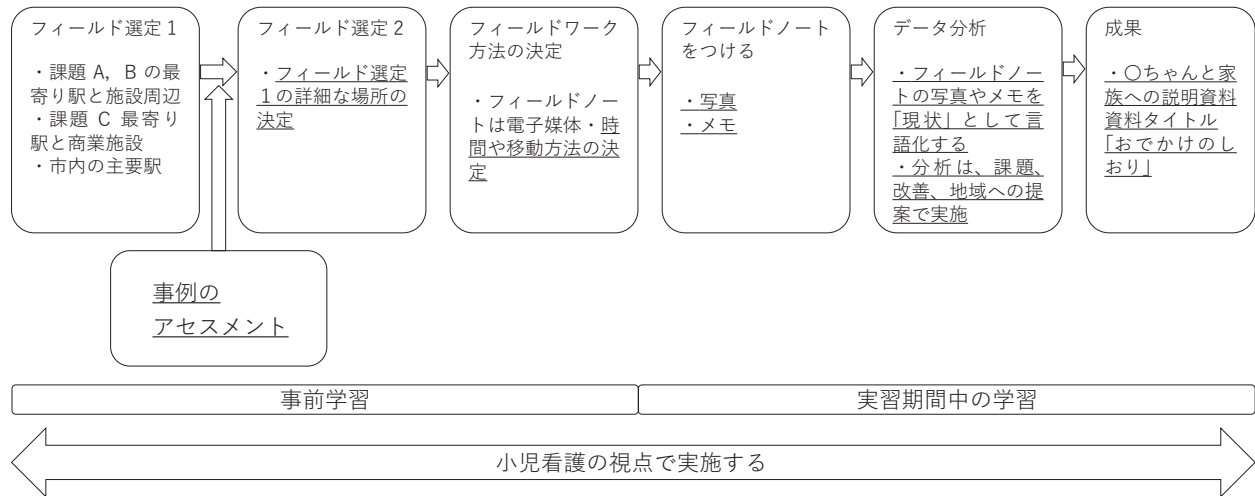


図1 フィールドワーク実習の過程

など事前に教員から説明していたため、学生は注意を払っていた。

#### (1) 事例の作成とフィールド選択1

事例は、参考文献<sup>11)</sup>に記載されている事例や担当教員がこれまでの臨床経験の中で担当してきた複数のケースを参考にし、個人情報から子どもと家族が特定できないように配慮して作成した（資料1）。

次に、フィールドの選定を行った。具体的には、生活地域は課題Aの都市に設定し、かかりつけ病院も課題Aの病院とした。また、定期的な小児専門外来の受診は、課題Bの病院に設定した。さらに、訪問を希望している商業施設は、課題C病院施設の院内学級行事で遠足に出かけている場所を候補地とした。これらの地域や施設は、小児看護領域の実習施設の周辺とすることで、事例の子どもと家族の生活状況をより具体的に学ぶことができると考え、設定した。

そして、小児の教員2名で課題Cの周辺地域と候補の商業施設に出向き、人流や時間内での移動が可能であるかといった、事前調査を行った結果を踏まえて、事例とフィールド選定1の決定をした。

#### (2) 事前課題の内容

事前課題は、実習前に対面で1回につき90分の計3回に分け、解説や課題の進捗を確認した。

学生には、フィールドワーク実習のスケジュール概要（表3）、事例、目標、リサーチクエスチョンを提示し、事前課題の（資料2）を説明した。

事前課題の概要は、3歳1か月の気管切開と胃ろう

等の医療的ケアが必要な子どもとその家族の看護をアセスメントし、日常的に必要な看護上の問題を明らかにすること、事例の子どもと家族が利用できる制度を具体的にまとめること、「事例の子どもと母親は、初めて、公共交通機関を使って商業施設に遊びにいけるか」に回答するために必要な地域調査の場所や時間等の具体的な実習スケジュールを立案することであった。

また、フィールドノートと情報分析方法に関する資料<sup>7)</sup>を読み、フィールドノートとは何か、地域でメモを取るときの方法や注意点、メモを清書する際のアセスメントの視点などを事前学習とした。

#### (3) 実習の内容

学生は、事前学習の成果を基に、フィールドワーク実習を行った。フィールドノートは学生の電子媒体でメモや写真で情報収集し、それらを言語化してデータとして「現状」としてまとめる。この情報は、ドライブを利用して学生間で共有してもらい、情報の整理やアセスメントした結果の清書についても、学生間で相談しながら進めた。分析の視点は、「課題」、「改善」、「地域への提案」とし、成果は、事例の子どもと家族への説明資料である「おでかけのしおり」を作成することであった。

学生は、実習6日目、8日目、9日目に地域に出かけてデータ収集や分析をしながら「現状」としてのまとめを行った。実習7日目は、学内でデータ整理や分析の他に、事例の子どもに必要な医療的ケアである、

表3 フィールドワーク実習のスケジュール

曜日	月	火	水	木	金
日数	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目
場所	課題C周辺地域	学内実習	課題A周辺地域	課題B周辺地域	学内実習
午前 実習内容	現地集合 フィールドワーク	フィールドワークま とめとスケジュール の見直し	現地集合 フィールドワーク	現地集合 フィールドワーク	実習まとめと午後の 発表準備
午後 実習内容	現地再集合 フィールドワーク	事例に関連する 技術演習	現地再集合 フィールドワーク	フィールドワーク 帰学して カンファレンス	発表会
	現地解散	大学で解散	現地解散	大学で解散	大学で解散

吸引や経管栄養等の演習をした。実習7日目と9日目にカンファレンスを行い、学びを統合する時間を設けた。

#### (4) 実習指導体制

混合病棟の実習の担当教員が継続して指導した。

### 5. 学びの共有とまとめ

実習10日目は、事前学習から実習中での学びをグループワークで振り返りを行うことや、グループでまとめた学びを発表し、他のグループと学びを共有した。また、実習のまとめとして、レポート課題に取り組むことで、学びの整理や統合をするよう設定した。

学生の学びの発表は、子どもの成長に合わせた看護の提供や保護者への対応、混合病棟で入院している子どもと家族が安心して入院生活が送れるための工夫、病院経営や医療制度等が入院中の子どもと家族の療養環境に影響していること等が、具体例を交えながら述べられていた。また、医療的ケアが必要な子どもと家族が退院時に必要な看護、外出時に注意や配慮が必要なこと、知っておくべき制度や法律など、フィールドワークを通して学んだことが述べられていた。さらに、学生レポートや記録物は、実習目標に沿って記載されていた。これらから、学生は、計画した実習プログラム内容を遂行でき、実習目標を達成することができた。

## V. 教員の関わりの工夫

### 1. 事前学習の取り組みへの支援

#### (1) 事例のアセスメントの指導

学生は、事例の看護過程について、グループメンバー2名で取り組んだ。しかし、アセスメントや援助

の方向性が定まらず、解釈に戸惑っていた。そのため、身体面と社会面に関連する項目のアセスメントの一部を指導した。また、援助の方向性として、不安のある母親の相談事への回答であることを強調し、伝えた。

#### (2) これまでの学習経験の確認

これまでの実習で地域探索やフィールドノートの作成、データ分析への理解度を確認した。次に、資料3や参考文献を用いて、フィールドワークで情報収集をする際の注意事項について説明した。

#### (3) フィールドワークの詳細なスケジュール立案

事例のアセスメントが終了した後、詳細なフィールド場所の選定、時間や移動方法等の立案は、詳細に5W1Hで考え作成するよう指導した。

## 2. 実習中の支援

### (1) 混合病棟実習での指導（1週目）

混合病棟での実習は、入院している子どもと家族を中心に、成人や高齢者などの多数の患者を担当し、援助の見学や一部実施を行った。そのため、複数患者のカルテ閲覧や行動計画の立案について、情報収集の内容や要点の絞り方について指導した。また、援助計画を遂行するための優先順位の考え方なども指導した。さらに、受け持ちは高齢者が含まれることもあった。そのため、混合病棟にいる子どもと家族の療養環境の向上に向けて、実習病棟の設備利用の工夫の実践について、具体的に学ぶよう指導した。そして、混合病棟でのスタッフ教育で工夫についての説明や看護の実践の見学を通して、事前学習の内容を補足し、学びを深められるようにした。

看護マネジメントについては、事前学習の内容と



シャドウイング実習で得られた学びを統合し、意味づけていくことに苦慮していた。そのため、昼休憩後やカンファレンスの時間を用いて、思考を整理できるよう指導し、質問に答える機会を設けた。

## (2) フィールドワーク実習での指導（2週目）

### ①体調への配慮

混合病棟は感染症の子どもが入院している病棟であったため、フィールドワーク実習中は、感染症の潜伏期間である可能性を考慮する必要があった。そのため、実習開始時や現地での集合の際などに、体調確認や感染予防行動について口頭で確認しながら実習を進めた。

### ②フィールドノートを付ける際の指導

フィールドワークを進める際の注意事項をフィールドワーク開始前に口頭で確認した（資料3）。また、収集したデータを提出してもらい、個人情報や著作権侵害等の問題はないかを確認した。

### ③データ分析

データ分析は、小児看護の視点で実施するよう指導した。具体的には、事例の子どもと家族の要望や不安に回答するために情報を整理しアセスメントをすることであった。よって、フィールドワークで得た情報は、日にちと調査場所ごとに、現状、課題、アセスメントをもとに改善案を表などにして整理し、まとめるよう指導した。

また、法律や地域の制度を基に地域への提案も追加したいと学生から相談があり、分析の視点を追加するよう指導した。

### ④地域探索中の指導

地域探索は、学生が公共交通機関の乗り換え時間や情報収集をする場所と実施時間などの行動計画を事前に確認した。その際に、実習時間内に実現可能であるか、情報収集する場所での注意事項は考えられているかを、確認した。また、学生が主体的に実習を実施できるよう、地域探索中は学生で行動してもらったが、教員も同様の地域を探索し、学生からの質問や不測の事態に備えられるようにした。さらに、学生の質問や要望に応えられるよう、事前に集合場所を設置し、実習の開始時、お昼休憩や実習終了時に対応した。

### ⑤子どもと家族への説明するための資料の作成に対する指導

事例の子どもと家族のアセスメントを踏まえ、個別性のある子どもと家族への説明するための資料を具体

的に作成するよう指導した。

## (3) 混合病棟とフィールドワークにおける実習での学びを統合するための指導

実習最終日は、学内でグループワークと学びの発表を行った。

初めに、学生が学びを統合し、意味づけていくために実習目標を再度読み返してからグループワークを開始するように指導した。

次に、混合病棟の実習では、健康障害で入院している子どもとその家族の看護について学んだことを踏まえて、フィールドワーク実習での実施内容を振り返ることを指導した。今回の実習では、混合病棟の実習で医療的ケア児を受け持つことはなかったが、事前に設定した事例をイメージしながらのフィールドワーク実践を具体的に学びの内容を振り返らせ、統合できるようにした。

## VII. 考察

### 1. 混合病棟とフィールドワーク実習プログラムの意義と課題

2023年度の小児看護学領域での統合実習において、小児・成人混合病棟での実習と地域で生活する医療的ケア児の事例を踏まえたフィールドワーク実習を併用したプログラムを立案し、実施した。

学生が記載したレポートや発表会での内容から、1週目の混合病棟の実習では、実習のねらいである（1）子どもの成長発達に必要な環境および支援の在り方、（2）子どもの健康支援に必要なマネジメントについて、達成できたと考える。また、2週目のフィールドワーク実習を行ったことで、退院後の子どもと家族が、日常生活の中で、必要な支援の実際について想像しやすくなり、地域で生活する子どもと家族への支援についての理解が深まっていた。そのため、実習のねらい（3）退院後に地域で生活する子どもと家族への継続的な支援や具体的な援助についても学べたと考える。

フィールドワーク実習は、学生が主体的に学び、社会の問題解決に参加し実践力を育成するには有用であり、学習する意欲も刺激する<sup>3)</sup>と述べられている。統合看護学実習は統合科目であり、小児看護学実習を終えた最終学年のため。そのため、ある程度の知識や技術を習得しており、主体的に学べた要因とも考えられ、目標達成状況を鑑みると取り組む意義があったと

考える。

しかし、履修学生が2名と少なかったこと、教育効果について、質や定量的に測定し、客観的に評価することはできなかったため、今後の検討課題である。

## 2. フィールドワーク実習を進める上で生じた課題

今回、本学の小児看護学領域で実習にフィールドワークの手法を取り入れることは初めての試みであった。そのため、実習を進める上で生じた課題が7点見いだされた。

### (1) フィールド選定の見直し

フィールドワーク実習は、地域探索は3日間で行った。調査地域は、3つの病院と1つの商業施設やその周辺地域と駅周辺で行った。移動は電車や徒歩になるため、調査にかけられる時間の制約があった。統合実習の学生は、4年生であったため、これまでの実習において地域探索の経験があった。また、2人で行動したため実施できたが、実習時間がとてもタイトになった。先行研究では、フィールドワーク実習の際に、1地域を数日かけて探索し分析する手法の実習においても、実習目標が達成できたという報告もある<sup>10)</sup>。そのため、調査地域の限定や、施設の厳選をすることで、地域探索、情報の分析や思考を整理する時間を十分に設けたい。

### (2) ICTの活用

フィールドノート、データ分析、成果物の作成、実習記録類は、電子媒体を使用して行った。画像の加工や保存、データ共有の方法、著作権やプライバシーの保護について留意しながら、今後もICTの活用を継続する。

### (3) 実習スケジュール変更への対応

訪問予定であった商業施設の休館日と実習日時が重なり、実習スケジュールの一部を急遽変更した。この時期の学生は、講義、卒業研究や就職試験の準備等と重なるため、多重課題への配慮が必要である。

### (4) 代替え案の作成

天候による日程やスケジュール変更の案を考えておく必要がある。フィールドワークは外で行うこと多く、天候や気温が実習中の学生の体調や実習の進捗に与える影響が強い。実習スケジュールは、天候による代替え案を事前に準備しておく必要がある。

### (5) 実習を遂行するために必要な経費

今回、調査対象の商業施設代は学生の同意のもと、

個人でチケット代を負担してもらった。また、外での実習であったため、公共交通機関の運賃や外食による費用が、他課題の学生と比較し、多かった可能性がある。今回は、実習メンバーが決定してから、必要な経費の自己負担について説明した。今後は、課題を選択する前に、施設、交通費、昼食代といった費用が必要となることを事前に説明する必要がある。

### (6) 思考を整理するため場所の確保

フィールドワーク中、大学以外で学生が思考やデータを整理する場所を確保する必要がある。学生は、情報収集と分析を同時に行いながら地域探索を行った。そのため、教員に分析内容に対する指導を求めることが多く、話し合う場所に苦慮した。また、フィールドノートは、学生のタブレット端末とノートパソコンを併用しておこなったため、充電がなくなると実習の継続が困難になる。今後は、地域探索の周辺に、話し合いや思考の整理ができる場所の確保をする必要がある。

### (7) 参考資料の紹介

学生は、事例の子どもと家族の状況に似ている動画を探して視聴し、フィールドワーク中の情報収集や分析の資料として利用していた。今後、参考資料の一つとして、動画も選定候補とする。

## VIII. 結論

1. 学生は、混合病棟と医療的ケア児の事例を用いたフィールドワークの実習プログラムを遂行でき、実習目標を達成することができた。
2. フィールドワーク実習を進める上で、フィールド選定の見直し、ICT活用の継続、実習スケジュール変更への対応、代替え案の作成の必要性、実習を遂行するための経費、思考を整理するための場所、参考資料の選定といった7つの課題が明らかとなった。また、これらを基に実習プログラムを見直す必要がある。
3. 教育の効果を検証し、混合病棟とフィールドワークを併用した実習プログラムの確立が課題である。

## 【文献】

- 1) 厚生労働省：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書。掲載日2007年4月1日。<https://www.mhlw.go.jp/s>



- hingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf (閲覧日2023年8月29日)
- 2) 厚生労働省：母性看護学実習及び小児看護学実習における臨地実習について。掲載日2015年9月1日。  
<https://www.midwife.or.jp/pdf/h27tuchi/270901.pdf>  
(閲覧日2023年11月24日)
- 3) 文部科学省：大学改革実行プラン 社会の変革のエンジンとなる大学づくり。掲載日2012年6月。[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/24/06/\\_icsFiles/afiel\\_dfile/2012/06/05/1312798\\_01\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/06/_icsFiles/afiel_dfile/2012/06/05/1312798_01_3.pdf) (閲覧日2023年9月25日)
- 4) 厚生労働省：医療的ケア児等とその家族に対する支援施策1. 医療的ケア児について。  
[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/shougaishahukushi/service/index\\_00004.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi/service/index_00004.html) (閲覧日2023年11月24日)
- 5) 日本新生児看護学会：NICUに入院している新生児の痛みのケアガイドライン。掲載日2020年3月。<https://minds.jcqhcn.or.jp/n/med/4/med0274/G0001169> (閲覧日2023年8月29日)
- 6) 保育所等における医療的ケア児への支援に関する研究会：保育所等での医療的ケア児の支援に関するガイドライン。掲載日2021年3月。<https://www.pref.yamagata.jp/documents/22828/gaidorain.pdf> (閲覧日2023年9月25日)
- 7) 佐藤郁也：フィールドワークの技法。156-217, (2020)
- 8) 箕浦康子：フィールドワークの技法と実際。21-40, 41-55, 141-155 (2021)
- 9) 柴山真琴：子どもエスノグラフィー入門。45-54, (2021)
- 10) 松本裕佳里, 藤原悠香, 宮城由美子：小児看護学実習にフィールドワークを取り入れた学生の学び。福岡大学教育開発支援機構紀要4, 77-88 (2022)
- 11) 厚生労働省：医療的ケア児者とその家族の生活実態調査報告書。掲載日2020年3月。<https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000653544.pdf> (閲覧日2023年9月25日)
- 12) 厚生労働省：大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会第二次報告 看護学実習ガイドライン。掲載日2020年3月30日。[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/098/gaiyou/mext\\_00260.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/098/gaiyou/mext_00260.html) (閲覧日2023年8月29日)

(2023年9月26日受付、2024年1月15日受理)

## 資料1 フィールドワークの事例

事例：3歳1か月の女の子、お父さん、お母さんの3人で生活している。自宅は集合住宅の3階で、エレベーターが設置されている。

40週で出生したが、顔貌の変形、無呼吸などあり、NICUへ入室。上気道が閉鎖されていたため、すぐに気管切開が施された。しばらく、閉鎖式保育器内で人工呼吸管理されていたが、1か月ほどで、人工呼吸器が外され、気管切開部からの酸素投与があれば、自発呼吸で過ごすことができるようになったため、7か月ほどで退院した。

現在は、3歳1か月で、自宅で生活している。気管切開しているが、room air 自発呼吸で過ごすことができる。気管内吸引は、元気であれば、起床時と就寝前の2回／日で過ごせる。ただし、外出時は念のため、ポータブル吸引機を持参し、万一来備えている。栄養は、下顎がとても小さく、開口がほとんどできないため、胃ろうによって胃に直接栄養を入れている。発声ができないが、手話やジェスチャーで自分の思いを伝えることができる。自立歩行は安定している。吸引やカニューレの自己抜去が危険なことは、子どもなりに理解している様子で、吸引や注入時は子どもなりに協力的である。自分で排たんする練習をしているが、未習得である。

課題Aの病院がある市に住んでおり、医療的ケアに必要な物品の受け取りや定期受診、感冒などは課題Aの病院を受診している。4回／年、課題Bの専門病院の外来で定期的に診察を受けている。

今回、母親は、子どもと2人で課題Cの周辺地域の商業施設に遊びに行ってみよう、と計画した。しかし、初めてなので不安があり、母親は看護師に相談した。

母親からの相談内容は、以下のとおりである。

- 1) 公共交通機関で、子どもと2人で行ってみたいと思っている。
- 2) 子どもの健康状態としては、お出かけできていると思っている。
- 3) 遠出をするための必要物品は、何が必要になるか。
- 4) 行く前に、子どもと練習しておいた方がいいものはあるか。
- 5) 途中で子どもの具合が悪くなったとき、どうすればいいか。
- 6) 訪問や病院の看護師さんは、お願いすれば一緒に来てくれますか。

フィールドワーク実習の課題：事例のアセスメント、制度の調べ学習、技術演習やフィールドワークを通して、〇ちゃんとその家族に、これらの質問への2人の回答を出すことを目指します。

## 資料2 事前課題

1. 医療的ケアの必要な事例の子どもと家族の生活を知るために、アセスメントを行う。
2. 日本の医療的ケア児に関連する法制度を調べてまとめる。その後、課題A市で事例の子どもと家族が利用できる制度を具体的にまとめてください。
3. フィールドワークの詳細な場所の案を決め、それぞれの地域にかけられる時間配分、移動方法といった、スケジュール案を作成してください。
4. 学内実習日に、事例の子どもの療養に必要なケアが行えるように、学生自身の看護技術の向上を目指します。ケアの項目は、グループで相談して決定し、演習できるようにノートなどにまとめておいてください。例) 経管栄養、口鼻腔吸引、おむつ交換など

## 資料3 フィールドワークを進める際の注意事項

1. 〇ちゃん家の出発駅は、課題A周辺駅とし、可能な範囲で公共交通機関については調査を進める。
2. 駅周辺の状況調査は、課題A駅、課題B駅、課題C駅、市内の主要駅の4つとする。
3. 駅周辺や商業施設への道中や地域の環境、施設などについて、医療的ケア児と家族が利用する際の、「現状、課題、改善案」をまとめようとしてみると、考えやすい。
4. 公共交通機関を利用すること。
5. 学生の住居に違いがあると思うので、駅周辺の調査に関しては、相談し、学生でスケジュールを立てること。
6. 学生証は必ず携帯すること（身分を示すため）
7. フィールドワーク中、施設の人を含め、職務質問される可能性がある。何のためにフィールドワークで情報を収集しているのか、自分の言葉で説明できるようにしてから、実習に臨むこと。
8. 服装については、医療的ケアが必要な子どもの養育者に準ずること。
9. フィールドワーク中の写真撮影については、トイレや授乳室、病院などでは行わないこと。また、他者が映り込んだり、人流にさからったりプライバシーを侵害するような撮影は控えること。（画像は、HPや自分でイラストにすると良い）

## Examination of the Integrated Nursing Practice Program in Pediatric Nursing

Kaori MIYAKE, Shizuno ITOI

### **【Abstract】**

**Objective:** We aimed to report a training program that combines a mixed pediatric/adult ward and fieldwork training based on a case study of a child with medical care living in the community and discuss future issues in integrated training in the field of pediatric nursing in FY2023, considering the pediatric medical care and social situation in Japan.

**Methods:** Practical training in the mixed ward included practice and observation of nursing care of hospitalized children and their families to learn about the environment and support necessary for children's growth and development. Mixed ward management included an opportunity to observe ward management and a clinical lecture by a nursing manager to learn about leadership and membership. Fieldwork practice was conducted using paper-based case studies of children with medical care needs and their families so for nurses to understand the kind of assistance they need to provide when such children who have been hospitalized are discharged home.

**Results:** The nursing students accomplished their training goals by performing a practical fieldwork training program using a mixed ward and a case study of a child receiving medical care to deepen their learning.

**Conclusion:** The issues were to review the training program on the basis of the concerns that arose in proceeding with the fieldwork training, to verify the educational effects, and to develop a training program that combines mixed wards and fieldwork.

**Key Words:** Pediatric nursing, Integrated nursing practicum, Pediatrics/Adult mixed ward, Fieldwork, Nursing practice program

Department of Nursing, Faculty of Nursing, Mejiro University